

105
(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平11-43146

(43) 公開日 平成11年(1999) 2月16日

(51) Int.Cl.⁶

B 6 5 D 17/32

識別記号

F I

B 6 5 D 17/32

審査請求 未請求 請求項の数 1 書面 (全 3 頁)

(21) 出願番号 特願平9-233212

(22) 出願日 平成9年(1997) 7月25日

(71) 出願人 597112081

有限会社藤アイデック

茨城県水戸市八幡町15番4号

(72) 発明者 藤沢 恒志

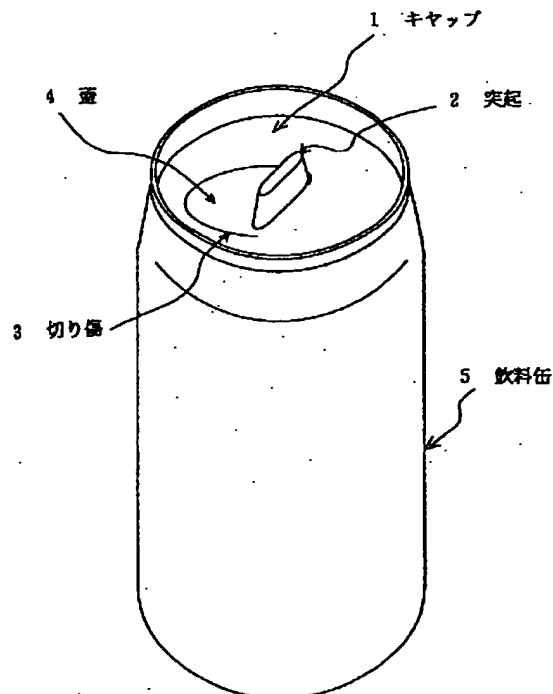
茨城県水戸市八幡町15番4号

(54) 【発明の名称】 押すだけで開蓋できる飲料缶の蓋

(57) 【要約】

〔課題〕 この発明は、キャップの中央部に設けた突起を押すだけで、開蓋できる飲料缶の蓋に関するものである。

〔解決手段〕 飲料缶5に設けたキャップ1の中央部に突起2を設け、突起2の基部に近接したところから、キャップ1に切り傷3を円弧状につけて蓋4を形成する。



1

【特許請求の範囲】

【請求項1】(イ) キャップ1の中央部に突起2を設ける。

(ロ) 突起2の基部に近接したところから、キャップ1に切り傷3をつけて蓋4を形成する。

以上の如く構成された、押すだけで開蓋できる飲料缶の蓋。

【発明の詳細な説明】

【0001】〔発明の属する技術分野〕この発明は、キャップの中央部に設けた突起を押すだけで、開蓋できる飲料缶の蓋に関するものである。

【0002】〔従来の技術〕従来の飲料缶を開蓋して飲料を飲む場合は、最初に把手を爪または、指先で引き起こして開蓋し、次に、引き起こされた把手が飲料を飲む際に、邪魔にならないように、元の位置に押し戻すことが必要であった。このことは、把手とキャップの間隙が僅かであるので、最初に把手を引き起こす際に、爪に傷をつけやすく、特に女性においては、マニキュア等で手入れを施し、また、長く整形した爪で把手を引き起こす際には、細心の注意を払っても爪に傷をつけることが度々あった。このように、開蓋して飲料を飲む場合は、把手を引き起こした後、元の位置に押し倒さなければならず、これは極めて煩わしいことであった。また、爪に手入れを施した女性にとっては、開蓋の度に爪に傷をつけないように細心の注意をしなければならず、これも極めて面倒であり、また、爪に傷をつけた場合には再手入れが必要になり、これもまた、極めて煩わしく面倒なことであった。

【0003】また、従来の飲料缶の蓋は、キャップと把手を別々に製造し、それらを組み合わせたものであるから、使用材料が多く必要であるとともに、製造工程が複雑であって、多くの労力を必要とした。このことは、資源の無駄遣いであるとともに、不経済なことであった。

【0004】〔発明が解決しようとする課題〕したがっ

2

て、各メーカーとも、この押すだけで開蓋できる飲料缶の蓋を、莫大な研究費と試作費をついやして研究したが、解決しなかった。本発明は、こうした使用者及び各メーカーの強い要望にこたえるために発明されたのである。

【0005】〔課題を解決するための手段〕いまその構成を説明すると、

(イ) キャップ1の中央部に突起2を設ける。

(ロ) 突起2の基部に近接したところから、キャップ1に切り傷3を円弧状につけて蓋4を形成する。

以上のように装置する。

【0006】〔発明の実施の形態〕次に本発明の実施の形態を述べると、開蓋は、突起2を切り傷3の方向に指腹で押し倒していくと、キャップ1につけた切り傷3が突起2の基部に近接したところから順次破断し、円弧状の蓋4が飲料缶5の内部方向に順次開くとともに、突起2も蓋4の方向に順次傾斜して高さが低くなるので、飲料を飲む際に突起2が邪魔にならなくなる。

【0007】〔発明の効果〕したがって、開蓋の際には突起を押すだけでよいので、簡単に開蓋ができて、爪に傷をつけることがなくなるとともに、使用材料が少なくて済むので資源の有効利用に役立ち、また、組み合わせ部品を必要としないので製造工程が省略でき、経済的である。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の斜視図

【図2】本発明の平面図

【図3】本発明の開蓋したときの平面図

【符号の説明】

1はキャップ

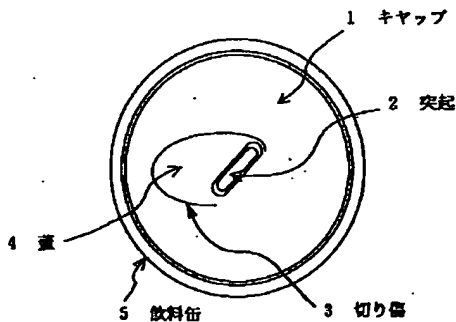
2は突起

3は切り傷

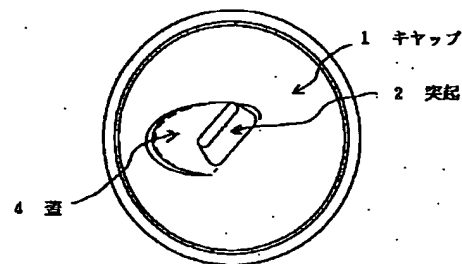
4は蓋

5は飲料缶

【図2】



【図3】



(3)

特開平11-43146

【図1】

